

第 19 回 ICPIC コロンビア大会参加報告

Reflection on the 19th International Council of Philosophical Inquiry with Children Biennial
Conference at Bogota, Colombia

西山溪（同志社大学）

1 はじめに

本報告は、2019年7月22日から27日にかけてコロンビアの首都ボゴタで行われた、「子どもとともに哲学探求国際会議（International Council of Philosophical Inquiry with Children: 以下 ICPIC）」の報告である。特に、本報告では筆者が参加した24日から本大会および27日のポスト・カンファレンスの構成や内容に焦点を当てていく。⁽¹⁾なお、本報告は、2022年に日本で開かれる ICPIC 東京大会（於 立教大学）への参考資料としての役割も持つことをここに記しておきたい。

2 ICPIC について

ICPIC は、「子どもの哲学（Philosophy for/with Children）」を実践する教師たちと研究者たちが、両者のさらなる協力関係の形成と子どもの哲学の国際的な認知を高めることを目的として1985年に設立された団体である。もともとは数十人程度の人々を中心とした小規模の団体だったが、現在では300人を超える会員を有する団体となっている。ICPICの会則によれば、ICPICの目的は以下の7つに要約される。⁽²⁾

1. 子どもの哲学の研究の促進、連携、普及、そして国際会議や専門家によるシンポジウムの開催を行うこと
2. 哲学者、教育者そして哲学を通じた子どもの認知発達の促進に関心を持つすべての人のネットワークを築くこと
3. 世界中の初等・中等教育の現場に哲学を導入することに取り組むような人間関係・協力関係を確立すること
4. 教育方法の諸問題に関して、研究領域の枠組みを超えた親交を確立すること
5. すべての初等・中等教育のカリキュラムのなかに哲学を導入しようと試みている人々の連携を生み出すこと
6. 子どもの哲学の授業のデザインおよび普及をサポートするための、地域に根ざしたセンターの設立を促進すること
7. すべての子どもの教育の質を改善するための不断の努力を行うよう、哲学者たちに要請すること

こうした目的のために、ICPICは国際大会・国際ワークショップの開催、アカデミック・

ジャーナルの運営、若手研究者奨励のためのエッセー・コンテスト、世界中の研究者・実践者が交流するためのオンライン・プラットフォームの開設などをおこなってきた。特に、2年ごとに行われる国際大会では、ICPICの最も重要なミッションである世界レベルでの子どもの哲学の普及のために、子どもの哲学が普及している欧米諸国だけではなく、草の根レベルで子どもの哲学の普及の試みがなされているアフリカ・アジア・南米諸国などでも開催されてきた。⁽³⁾

3 コロンビア、ボゴタ大会について

第19回目となるコロンビアのボゴタ大会では、「市民・主体性 (Citizen-Agent)」がカンファレンス・テーマとして設定された。このテーマには、南米をはじめとして世界各国で散見されるポピュリズム政治の台頭や、市場競争原理の教育への導入、そうしたなかでの市民の批判的思考力を涵養することの必要性といった事柄が背景にある。市民とはただ単に社会制度やシステムに参加するような人々をさすのではなく、自身が置かれた環境を絶えず批判的に検討し、時には権力に対しても批判的であり続けるような人々を指し、そうした主体的・批判的な市民像のために子どもの哲学は何ができるか、ということがこのテーマの中で目指されている。

大会には200名ほどの研究者、教員、実践者、教師教育者などが世界各国から集まり、各々が上記のテーマなどに関する様々な発表やワークショップの実践をした。今大会の最も大きな特徴としては、これまで子どもの哲学の研究の中では(欧米諸国の研究と比べて)それほど注目されてこなかった傾向にあるラテンアメリカ諸国の子どもの哲学に従事する研究者や実践者が数多く参加したことであった。特に、地元コロンビアや、ウォルター・コーハン氏を中心に子どもの哲学の活動を展開するメキシコやブラジルだけでなく、ペルー、アルゼンチン、ベネズエラ、チリ、エクアドル、ボリビア、コスタリカなどからも多くの人々が参加していた点が印象的であった。ラテンアメリカにおける子どもの哲学の関心の高まりは、カンファレンスの1回の発表枠(各2時間)につき8つほどのセッションが同時に配置されていた中で、5~7つの枠がスペイン語・ポルトガル語の発表、残りの枠が英語の発表といったことにも表れている。

4 発表・ワークショップについて

多くのセッションが同時並行で開催されていたことや、上記のスペイン語・ポルトガル語の発表には英語への通訳がない部屋も多くあったため、残念ながら筆者はすべての発表を聞いたわけではない。それでも、後に述べる豊富なソーシャル・イベントで出会った人々から、ラテンアメリカ系の部屋の発表について様々なことを聞くことができた。様々な発表があるなかで、一つの大きな特徴となったのが、多くの発表者がパウロ・フレイレの思想を下敷きとして今日の教育、社会、政治の問題を子どもの哲学の観点から論じていたという点にある。それはたとえば、管理主義教育に対するカウンター行動としての子どもの哲学というものから、哲学対話の「解放」の側面に焦点を当てた理論的発表、コロンビアにおける暴力の被害者である農民の子どもたちのケアとしての子どもの哲学、そして子

もの哲学の視点からみたラテンアメリカ教育の批判的考察といったものまで様々であった。

筆者自身が直接参加した（主に英語の）セッションの中にもいくつか興味深い発表があった。一つは、文化と哲学対話をめぐる発表である。ジェイソン・チェン（Jason Chen）氏による発表 *Does Philosophy Kill Culture* では、中国系カナダ人である自身の経験を踏まえつつ、哲学（対話）を学ぶことによって子どもは自身の家族が持つ様々な固有の風習、文化、習慣というものに疑問を持つことになり、究極的には習慣などによって結びつく様々なアイデンティティ・グループのつながりを破壊してしまう恐れがあるのではないかという問題提起をしていた。また、フィリピンのピーター・エリコール（Peter Elicor）氏による *Resisting to philosophize from nowhere* では、子どもの哲学の研究の西洋中心的な傾向を批判し、先住民の持つ特有の言語・表現・思想といったものが軽視ないしは無視され続けてきたことを問題視した。また、筆者が発表したセッションにおけるリアノン・ラブ（Rhiannon Love）氏の発表 *Encountering the teacher-agent* では、教員養成課程の教師の目線から、「自由」「平等」「ケア」を柱とする子どもの哲学と「測定」「競争」「成功」を柱とする学校文化の本質的な相容れなさを指摘した。

ほかにも、新たなツールを用いたり、新たな場で行われる子どもの哲学の実践報告なども数多く行われていた。河野哲也氏、豊田光世氏、土屋陽介氏、筆者らの日本人グループによるワークショップ *Repertoires of philosophical inquiry* では、ビジネス哲学対話、地域やコミュニティでの哲学対話、学校において自主的に行われる哲学対話など様々な種類の哲学対話の紹介をし、その後参加者と哲学対話の応用可能性について議論を行った。アレックス・ニュービー（Alex Newby）氏による発表では、カナダの中で現在精力的に行われている「哲学サマーキャンプ」についての報告が、カレン・ミゼル（Karen Mizell）氏による発表では、イギリスで行われているエシックス・ボウル（Ethics Bowl）という哲学対話のコンペティションについての報告がそれぞれ行われた。また、ダニエル・アンダーソン（Daniel Anderson）氏による *Bringing philosophy to gaming* では、哲学対話とボードゲームを組み合わせることで、子どもたちがより協力的なプレーをしたり、ルールを適時改良するなどしながら楽しく思考するための方法についての発表がなされた。最後に、現在の ICPIC の会長であるアリー・キゼル（Arie Kizel）氏は、スマートフォンのアプリ WhatsApp を用いた、オンライン上での哲学対話の可能性についての提案がなされた。

なお、今回の発表では、事前にフル・ペーパーの提出が義務付けられていたことから、多くの発表の議論の質はこれまでよりも高水準であったように思われるが、他方で（英語での）フル・ペーパー提出にハードルを感じる非英語圏の人々や、若手研究者の発表が例年よりも少なめであったこともここに記しておきたい。

5 ソーシャル・イベントについて

個人的には、ICPIC の醍醐味はソーシャル・イベントにあると考えている。筆者は 2013 年の南アフリカ大会からコロンビア大会を含めた計 4 回の ICPIC に参加をしているが、他の国際学会と比較した際の ICPIC の大きな魅力として挙げられるのが、参加者同士の交流の機会が非常に多いという点である。筆者が以前参加した他の学会（オーストラリア政治学会、世界政治学会など）では、ICPIC の数倍以上の規模ということもあり、どうしても

顔見知り同士の狭く閉じた交流で終わってしまうことが多かった。他方で ICPIC では毎年様々なソーシャル・イベントが用意されており、これまで出会うことのなかった人々が交流するための機会が数多く用意されている。それは例えば、午前中のモーニング・ブレイクから始まり、全員一緒でのランチ、現地の学校や美術館へのツアー、カンファレンス・ディナーでの催し物など様々である。それぞれの大会で行われる様々なソーシャル・イベントを楽しみに ICPIC の大会に参加する人もおり、2022 年の東京大会でもすでに多くの参加者から楽しみにしているという旨のメッセージを受け取っている。

6 Special Interest Group について

2 節の ICPIC の会則にも記したように、ICPIC は様々な関心を持つ子どもの哲学の研究者・実践者のさらなる交流を目指している。この目的のために、ICPIC は現在 Special Interest Group (以下、SIG) の設立を計画している。このグループでは、研究者たちは共通のテーマや関心 (例えば「子どもの哲学と現象学」「子どもの哲学と認知能力の発達」など) のもとに集まり、ICPIC に予算を申請し、研究活動、出版活動、ワークショップの開催などを国際的に行うこととなる。ICPIC 最終日のポスト・カンファレンスでは、この SIG の設立に向けたミーティングに当てられた。まず、会長のアリーから SIG の目的や利点 (ICPIC 内の新たなコミュニティの設立、本の出版、若手研究者の活躍の場の確保、子どもの哲学の学術的な貢献度の向上など) が説明され、その後全体での議論を行った。会場からは SIG において使用可能な言語の問題や、異なる SIG 同士の交流の可能性について意見が交わされ、最後に参加者全員でどのようなテーマでの SIG があり得るかを一人ずつ発表し、ワークショップは終了となった。⁽⁴⁾

7 おわりに

以上、駆け足ではあるものの大まかに ICPIC ボゴタ大会について振り返りを行った。既に述べたように、今回の大会で特に驚かされたのは、ラテンアメリカ諸国における子どもの哲学の広まりと熱意であった。もちろん、P4C は万能薬ではなく、むしろ P4C を導入したことにより、ラテンアメリカの実践者たちは様々な政治的 (独裁政権、社会の右傾化)、経済的 (貧困の増加)、文化的 (女子の教育の軽視) な問題に (多くの場合一人で) 立ち向かわざるを得なくなっているような状況に置かれている現状がある。だが、今回の ICPIC ボゴタ大会はそうした通常孤独感・孤立感を感じる教師・実践者たちが新たな仲間を見つけ、励ましあいながら勇気をもらうことのできる大会として機能したのではないだろうか。次回の東京大会では、もともと英語と日本語のみを公式言語としていたが、スペイン語での発表を追加したのは、こうしたラテンアメリカでの熱意に触れたところが大きいと言える。いずれにせよ、次回の大会の開催委員の一人として、多くの国にとってより有意義となる大会の開催を目指したい。

【註】

(1) なお、22 日～23 日はワークショップ形式のプレ・カンファレンスとなっていた。

(2) 会則の基本理念についてはホームページ上でも閲覧可能 (<http://my.icpic.org/about.html>)

(3) 過去の大会の開催地は以下の通り。

デンマーク (1985 年)、ブラジル (1987 年)、台湾 (1989 年)、メキシコ (1991 年)、オーストリア (1992 年)、スペイン (1993 年)、オーストラリア (1995 年)、アイスランド (1997 年)、ブラジル (1999 年)、イングランド (2001 年)、ブルガリア (2003 年)、メキシコ (2005 年)、イスラエル (2007 年)、イタリア (2009 年)、韓国 (2011 年)、南アフリカ (2013 年)、カナダ (2015 年)、スペイン (2017 年)、コロンビア (2019 年)。2022 年は日本で開催予定。

(4) SIG 参加者の関心テーマは以下の通り。

子どもの哲学の政治性、大学院における P4C 教育プログラムの開発、感情と探求の共同体、両親との哲学、対話と平和、様々な種類の P4C、P4C とゲーム、P4C とリテラシー、脱植民地化と P4C、文化を超えた哲学対話、実験的研究、分析哲学と P4C、現象学と P4C、非言語コミュニケーションと P4C、先住民の知恵と P4C、批判的教育学、教師教育、宗教と P4C、政治的・文化的に分断された社会における P4C、P4C と早期教育、持続可能な開発のための教育、P4C とインクルージョン、P4C と哲学プラクティス、フレイレ・脱植民地化・P4C、若者と P4C、環境倫理と対話、動物倫理と対話、批判理論と P4C、アイデンティティの問題